

東北大学実践宗教学寄附講座 ニュースレター

Department of Practical Religious Studies
Graduate School of Arts and Letters
Tohoku University

第2号 2012年12月10日

追悼特集 岡部健先生を偲んで

追悼シンポジウム「医師岡部健が語ったこと」のご報告・・・2頁
 <岡部先生の言葉より>・・・3頁
 ごあいさつ 岡部耕・・・4頁
 追悼文集・・・4頁
 吉永馨／鈴木岩弓／金田諦應／奥野修司／川上直哉／高橋悦堂
 ／小西達也／相澤出／伊藤文雄／櫻井恭仁／佐藤央千／篠原祥
 哲／桐原健真／井形英絵／谷山洋三／高橋原

第一回臨床宗教師研修（前半）を終えて・・・15頁
 受講生の感想・・・17頁

臨床宗教師研修（後半）
 について・・・19頁



活動報告（日本宗教学会パネル発表他）・・・20頁

岡部健先生追悼特集号

故 岡部 健

〔略歴〕

1950年3月14日 栃木県小山市に生まれる
 1978年3月 東北大学医学部卒業
 1978年5月 東北大学抗酸菌病研究所外科学部門入局
 1987年2月 博士（医学）
 論文「自家心肺移植に関する実験的研究」
 1987年4月 静岡県立総合病院呼吸器外科医長
 1991年4月 宮城県立成人病センター呼吸器科医長
 1997年4月 岡部医院開業 院長
 1999年12月 医療法人社団爽秋会設立 理事長
 2007年9月 医療法人社団爽秋会
 ふくしま在宅緩和ケアクリニック開設
 2008年5月 医療法人社団爽秋会
 緩和ケアクリニック仙台開設
 2011年5月 心の相談室設立 室長就任
 2012年4月 東北大学医学部臨床教授就任
 2012年9月27日 午後7時15分逝去 享年62歳
 戒名 観月院叡醫玄明居士

「戦後の日本では、宗教や死生観について語り、この暗闇に降りていく道しるべを示すことのできる専門家が死の現場からいなくなってしまいました。人が死に向かい合う現場に医療者とチームを組んで入れる、日本人の宗教性にふさわしい日本型チャプレンのような宗教者が必要であろうと考えてきました。」



在りし日の岡部先生（仙台市郊外「岡部村」にて）

「臨床宗教師」を構想し、実践宗教学寄附講座の生みの親とも言える岡部健先生は、2010年に余命10ヶ月の宣告を受けて以来闘病を続けて来られましたが、去る9月27日、ご自宅で静かに息を引き取られました。そこで今号を岡部健先生追悼特集号として、11月18日に行われた追悼シンポジウムのご報告と、寄附講座関係者からの追悼文を掲載いたします。

故岡部健先生追悼緊急シンポジウム 「医師岡部健が最後に語ったこと」

主催：東北大学実践宗教学寄附講座&心の相談室



岡部健先生遺影

日時：2012年11月18日(日)13:30-1630

会場：東北大学川内萩ホール会議室

(1)開会・黙とう

(2)経過報告 桜井恭仁（心の相談室理事）

(3)追悼講演

「在宅緩和ケアと宗教—岡部健とともに歩んだ10年をふり返って」竹之内裕文（静岡大学教授）

(4)シンポジウム「医師岡部健が最後に語ったこと」

奥野修司さん（ノンフィクションライター）

金田諦応さん（通大寺住職）

高橋悦堂さん（普門寺副住職）

小西達也さん（爽秋会チャプレン）

相澤 出さん（岡部医院研究員）

(5)「臨床宗教師研修報告」谷山洋三（東北大学准教授）

(6)閉会あいさつ 鈴木岩弓（東北大学教授）

11月18日は冷たい風の吹く日となりましたが晴天に恵まれ、岡部先生がご出演になったNHK「心の時代」の映像が流される中、200席ほどの会場に入りきらないほどの聴衆が開会を待ちました。

初めに岡部先生に黙祷を捧げた後、岡部先生とは40年来の盟友で



あり最後まで行動をとともにした桜井恭仁氏より、柳田邦夫氏の弔電紹介をまじえながら、ご自宅での最期の様子が報告されました。奥様が夕餉の支度をし、ご長男がシャワーを使う音を聞きながら、退院してご自宅に戻られたときに漏らされた「生活のある空間とはこんなにも素晴らしいものか」という感慨そのままに、穏やかで理想的な在宅死のあり方を示されたそうです。

続いて、竹之内裕文氏によって「在宅緩和ケアと宗教」と題された講演が行なわれました。お話は岡部先生の著述を引用しながら岡部先生の思想の到達点を残された我々が確認

し、共有できるように工夫されたスタイルであり、2002年秋に岡部先生と出会って立ち上げた「タナトロジー研究会」の歩みをふり返ることからはじめ、続いて、看取りと死生観の問題、在宅ケアの意義、そして臨床宗教師に期待することと考えられる課題へと議論を進められました。ケアチームの一員として、看取り・死者供養（グリーフケア）・儀礼を通してケア専門職のケアなどを行なうという臨床宗教師の役割について確認され、ホスピスに非医療者が入ることで、新たに看取りの文化が再構築されていくという見通しが示されました。



シンポジウム「医師岡部健が最後に語ったこと」には、岡部先生のご葬儀の導師を務められた金田諦応さん、在宅ケアの現場に入る臨床宗教師のプロトタイプとして岡部先生の看取りを命じられた高橋悦堂さん、高橋さんのスーパーバイザーとして最後の日々をともに過ごされた小西達也さん、岡部先生臨終の日までインタビュー取材*を続けられた奥野修司さん、岡部先生原稿作成の場に八年間立ち会ってこられた相澤出さんの皆さんが登壇されました。それぞれの皆さんの思いは、追悼文として掲載しておりますのでご参照下さい。

続いて谷山洋三東北大学実践宗教学寄附講座准教授より、10月と11月に行われた第一回臨床宗教師研修について写真を紹介しながら報告がありました。「日本型チャプレン」としての臨床宗教師の意義と役割（主として所属教団の信徒以外を対象とする、宗教協力を前提とする、布教伝道を目的としない、公共空間で、公的機関と連携しながら、多様な価値観を認める、等）が確認され、スピリチュアルケアと宗教的ケアの違い（前者は相手の中にある答えへの気づきを重視し、後者は宗教的資源を利用し、すでにある解決方法を提示する）などについても説明がなされました。



最後に、鈴木岩弓実践宗教学寄附講座主任教授から閉会の挨拶があり、長らく死と宗教の問題がタブー視されてきた時期を経て、脳死問題や阪神大震災を契機に、死を自分の問題として見つめ、宗教者が果たし得る役割を正面から見つめようという機運が生じてきたことなどが語られました。これは鈴木先生の行なってきた墓碑銘調査の結果からも読み取れることであるそうです。このような状況を背景に、一種のソーシャルムーブメントとしての臨床宗教師プロジェクトが、現代の宗教状況に風穴を空けることにもつながるのではないかと締めくくられました。（高橋原）

*岡部先生のインタビュー取材の成果が単行本として2013年1月20日に文藝春秋社より出版予定です。

＜岡部先生の言葉より＞

「亘理荒浜の被災地に立った時に感じたのは「合理的にものを考えられる場所も、空間も、時間もない、まるで空襲で爆撃を受けた様な状況」だった。そこに自分の身を曝したら、「ああ、人間と言うのは大きな存在にぶら下がって生きているんだな。個人が集合すると人間になるんじゃないんだ。実は逆なんじゃないか」と思った。

この想いは考えて得たものではない。ふっと湧いてきた。「あそうか！」と体にストンと落ちてきた。あの場では、物を考えるはずの自我そのものが破綻していた。

破綻した時に何が人間の心を支えられたのか、と言ったら、人間とは大きな命に繋がっているもんなんだ。俺が死ぬなんて事は、本当にちっぽけな事なんだ、という様な事が、リアルな感覚として自らの中から湧き出てきた。」（談話より）

「在宅での看取りができるかどうかは、宮沢賢治の「南ニ死ニサウナ人アレバ 行ツテコハガラナクテモイヽトイヒ」という一言をわれわれが言えるのかどうかにかかっています。われわれはあの一言を、本当に患者さんに言えているのでしょうか。生の世界を引き延ばす話ではなく、「怖がらなくてもよい」という道しるべを立てることができているのでしょうか。」（「患者体験からみえるケア」『緩和ケア』21-5、2011年9月）

「今、被災地だと霊的ケアができる人は宗教者しかいません。特に地域をよく知った宗教者。地域のお寺さんに幽霊が来たと言っても別段不思議なことではなく、まだそのへんにいて、おまえらのことが心配なんではないのか、お経をあげるから心配するな、と言い切れるのは宗教者しかいないですね。」（「一人ひとりの魂をおもい、そして看取る」『あけぼの』2012年11月）

ごあいさつ

おさむ
岡部 耕

父は3年ほど前にガンを患い余命10ヶ月を乗り越え長く過ごして来ましたが、しかし今年6月に再発がわかり自宅で療養してきましたが亡くなる2週間ほど前から体調を崩し家族の見守る中9月27日19時、安らかなるうちに息を引き取りました。62才でございました。

療養中の2週間は自分で日常生活をする事が困難になり家族、爽秋会の皆様の支えのもと介護ベッドを利用して過ごしました。

家では亭主関白で厳しい顔ばかりしてた父が日に日に穏やかになり普段見せない一面を様々見せてくれました。一つあげると治療にきてくれた看護師さんが来るたびにおはようございまーす、看護師さんが帰るたびにお世話様でしたーと普通なのかもしれませんが普段聞き覚えのない父の言葉につい笑みがこぼれてしまいました。僕も父を看病していくなかで亡くなる数日前にベッドに寝かしつけると、ありがとう！とさりげなく言われました。これも普通なのかもしれませんが父の心のある言葉をやっと聞けたような気がして何もできなかった父に僕もやっと一つ親孝行ができたと思います。

たくさんの方々にお見舞いにきていただき、父はこんなに来てくれるなんて俺の人生面白かったんだと嬉しそうに言っていました。

お客様が来てもしハビリパンツを履いたままズボンも履かずにタバコを吸って話をしているのに皆様から慕

われている父を見ると礼儀というもののよりも心を大事に、礼儀があっても心がなきゃダメなんだ！何かそのような事を教えられた気がします。

そんな皆様の支えの中、母が料理をしている普段の光景に落ち着いたのか母の後ろ姿を見ながら息を引き取りました。父が理想としていた在宅での看取りができたように思います。

父の考えを全て聞く事ができないままにはなってしまうましたが父はこう考えてたのかなと思う事はたとえば父の考えではなかったとしても父のおかげで立派に出せた答えなんだ！そう自信を持ってこれからの人生を歩んで参りたいと思います。

最後に父は人の為に生き甲斐にして来た人だともいます。一人一人がそうあるべきだとは思いますが、一人一人に少しでもそのような心があればいいのでは。人と人とのつながりをもっと大事にしていきたい。そう感じさせてくれました。

療養中は皆様からあたたかいお励ましやお見舞いを頂戴し、故人もさぞや喜んでいる事と存じます。故人になりかわりまして御礼申し上げます。

これからは残された私ども一同力を合わせて父の意志を受け継ぎ頑張っていく所存でございますのでこれまで同様の御指導御鞭撻を何卒お願いいたします。

〔10月1日の告別式、11月10日のお別れの会にて喪主挨拶として読まれたものです。〕

弔辞

仙台ターミナルケアを考える会会長

吉永 馨

岡部健先生、仙台ターミナルケアを考える会の吉永でございます。先生には今まで随分ご指導を頂きました。これからもご指導を受けなければならない時、先生は世を去りました。早すぎました。無念、残念でございます。

先生は早くからがん患者の在宅医療の必要性を認識され、身を挺してそれを実行に移されました。それは患者側が求めていたものであり、従来なかったものでした。

先生の事業は急速に進展し、何処にも在宅医療の拠点を設け、仙台市全域をカバーし、さらにその周辺にも及んでいます。

先生は単に在宅医療に専念するだけではなく、患者の心理、悩み、家族の苦しみ等を深く洞察研究する制度を作り上げ、お迎え現象の解明など、幾多の業績を上げておられます。その中から、宗教の心が必要なことを痛感し、欧米のチャプレンのような組織の構築を模索していました。

その矢先に東日本大震災が発生し、大量の死亡者が発生しました。お弔いすらできない状況を見

岡部健先生追悼文集



て宗教界が立ち上がり、宗派の壁を越えて、無料で奉仕し、死者の霊を弔いました。この緊急体制が発展し、これを今後も維持し、病氣やその末期を支えようとする運動が始まりました。これこそ岡部先生が長年模索を続けてきた制度であります。

この運動に岡部先生が加わり、医師側と宗教者側の協力体制によるガン患者の支援体制を確立しようとししました。これが「心の相談室」の目標であります。岡部先生がその室長となって新しい運動を開始し、東北大学の協力も得て、臨床宗教師養成の寄附講座が発足しました。まさにいざこれからという時、先生は病に倒れました。

先生はまさに巨人でありました。私たちは巨人を失い、途方に暮れています。ここまで動き出した「心の相談室」はどうなるのか。私たちが先生の意志を継いでその発展を図るほかはありません。現在種々協議中でございます。

先生、天にあって我々を見守り、励まして下さい。先生の御霊の安らかならんことを祈ります。

平成24年11月10日

弔辞

「心の相談室」事務局長

鈴木岩弓

岡部先生。

以前から先生がお病氣なことは存じており、覚悟はしておりました。しかし、いざこうした形で先生とのお別れを迎えることとなると、改めて無念な気持ちで一杯です。

私が先生と初めてお会いしたのは2001年の7月6日、先生が川内にあります私の研究室を訪問された

ことに始まります。先生は挨拶もそこそこに、私に対して「お迎え」を見た人は大往生する傾向が高いという経験則を披露され、その背後に地域文化のもっている宗教性が作用しているのではないかといった質問を熱っぽく語ってられました。一般には譫妄と処理されたりする現象に、医師が積極的な意味を読み取ろうとされていることは正直驚きでありましたが、経験則を素直に見つめようという、予断を排した先生の“科学者の眼”が非常に新鮮に映った記憶があります。以後この研究には、私の研究室の学生が多数参加させていただくこととなり、後の「お迎え」研究へと結実する中で大変お世話になりました。

先生との関係がより深まることになったのは、東日本大震災から一月あまり経った昨年の四月二十日、葛岡斎場でお会いした時からです。この時斎場では、仏教、キリスト教、諸教の宗教者の方々が、最後のお弔いのボランティア活動をしておりましたが、こうした活動を再編し、被災者のための宗教的ケアを行う組織化が話し合われました。そこで生まれたのが「心の相談室」でした。宗教者が自分自身の宗教の布教のためではなく、宗派宗教を超えた立場から被災者に寄り添った宗教的ケアを実現することを目的とし、先生がそのまとめ役の室長を、私が事務局長をすることになりました。多様な宗教者の活動を、医者と宗教学者が支えるという「心の相談室」は、価値中立的な場である東北大を会場に、毎週のように会議を開き、その活動内容を逐次検討し実行してきました。

会議に際して岡部先生は、要所で大局的見地に立ったご意見を開陳され、また医療界での情報などもお話しして下さり、「心の相談室」の活動方向をかなり上手に操縦して下さいました。先生の話し方・言葉遣いは、ソフトな中にも確としたところがあり、話の最後には決まっていた、はにかんだような顔で聴衆を見回し、軽く微笑みながら結ぶという、いわば「岡部節」とでも言う独特な雰囲気漂うものでした。

「心の相談室」の活動はさまざまでしたが、先生が一番期待されていたのは、ご自身で命名された「臨床宗教師」の確立であったと思います。これは日本版チャプレンともいえるべき専門職で、死に逝く人への“道しるべ”を示すことのできる宗教者です。この宗教者が普通の宗教者と異なる点は、自分の宗教の布教のためではなく超宗派超宗教的な宗教的ケアができて、その点から公的性格を担うことが可能となり、将来的にはどの病院や介護施設にも「臨床宗教師」が常駐し、宗派宗教を超えたさまざまな人々に、“道しるべ”を示すことのできる社会が実現されると先生はお考えであったと思います。しかし、その基盤を担う「実践宗教学寄附講座」が4月から開設され、10月からその第一回目の「臨床宗教師」研修を準備していた矢先、先生は旅立たれてしまいました。この仕事の完成までを見届けられなかった先生のお気持ちは、察して余りあるものがあります。

岡部先生により動き出した“世直し”は、まだ始まったばかりです。現代日本の宗教状況に対して風穴を開ける可能性を秘めたわれわれの活動は、寄附講座という性格

上、前進あるのみです。あとは、われわれ残された者が協力し合い、先生の御遺志を継いで「臨床宗教師」の確立を実現したく思っております。

医療と宗教の間の橋渡しを目指されてきた岡部先生、われわれの今後をどうぞ見守っていて下さい。これまで本当にありがとうございました。

2012年11月10日

追悼文

通大寺住職 金田諦応

平成23年1月、以前より知り合っていた川上直哉牧師にお誘い頂き、タナトロジー研究会に参加したのが先生との初めての出会いでした。

その時発表を担当した川上牧師に僧侶の私が感想を述べているのを面白そうに眺め、時々理屈っぽい口調でその場を仕切っていた仙人風情の方が先生であった事を知ったのは帰り際のことでした。

その時既に先生が癌に冒されていた事を知るよしもなく、4月に再び行われる研究会にも参加してみようかという軽い気持ちで分かれたのを記憶しています。

3月11日、震災発生。それぞれの場所で様々な震災体験をし、必死にその出来事を受け止めていました。

私は火葬場でのボランティア、49日被災地行脚、その後、傾聴移動喫茶「カフェ・デ・モンク」で被災地を巡り始めました。

先生と再会したのは五月、「こころの相談室」を立ち上げる会議でした。難しい議論はさておき、とにかく被災地に直接入り、宗教者も医師も「現場」から物事を考えようということで、度々「カフ

ェ・デ・モンク」での傾聴活動に参加下さいました。体調が安定しない中、先生にとっては残り少ない命をかけての日々であったと思います。今年の6月から参加が難しくなり、先生の「その時」が近い事を薄々と感じておりました。

8月末、先生の愛して止まない岡部村に行った際、私と高橋悦堂師を側に呼び、悦堂師には最後まで側にて看取るように、私にはその後の宗教儀礼を行うようにと申しつけました。

9月27日、その時が来ました。先生が命を賭して作り上げた「在宅での看取り」というシステムに支えられ、奥様のまな板の音と耕君のシャワーの音を聞きながら「生と死の境目のない」穏やかな旅立ちでした。

岡部健という人間が62年間住まいしたこの世界から「大いなる命の源」へお帰しする儀式を曹洞宗の規範により執り行いました。

ご戒名はご家族の想いも踏まえ、「観月院叡醫玄明居士」としました。

先生が旅だった日は一年を通して一番月の美しい時期です。太陽が命を育んできたのに対し、月は古来より日本人の「感性」「宗教性」を育んで来たと思います。先生は医学を通し「命の行方」を見つめてきました。その生き方を「観月」という言葉に込めました。

「月落ちて天を離れず なんぞ去来生滅を問わんや」。お姿は見えず、声は聞こえなくても、飄々とした先生の佇まいを全身で感じながら、先生の目指した道を進んでまいります。

先生、いや、玄明居士、願わくば私達の行く道筋を燦し銀のよう

な光で照らして下さい。

先生との出会いに心より感謝致します。
合掌

日本人の倫理と臨床宗教師

奥野修司

2011年の暮れでした。私と岡部先生の共通の友人から電話があり、岡部先生の遺書を書いてくれないと言われました。「岡部先生の考えていることは日本の財産だから、何とか記録に残して後世に読ませたい」といった内容だったと思います。

実は、私は喜んでその申し出を引き受けたわけではありません。前年の9月に、グリーフケアについて岡部さんの取材をしました。場所は二日町の診療所だったと思います。このとき岡部さんは、不遜な態度というか、ときどき横に寝転がって煙草の煙を吹かせながらインタビューを受けられたのです。

後日、話をうかがいますと、このとき体調が最悪だったそうですが、そうとは知らなかった私は、友人の申し出に今ひとつ乗り気ではありませんでした。でも、とりあえず会うだけ会ってみるということでお会いしたのは1月中旬でした。

岡部さんの話を聞いて、私は震えました。私は5年近くがん患者について取材をしてきましたが、これまで私が本当に知りたかったことが、なんとなく曖昧なままにされてきました。たとえば「お迎え」がそうです。それを岡部さんは次々と明快に答えられるのですから、これほどエキサイティングだったことはありません。

結局、その日から9月27日に亡く

なるまで、およそ170時間インタビューをしました。その中からとくに印象に残ったことを一つご紹介します。

岡部さんが最後まで気にしていたのが臨床宗教師でした。亡くなる2週間前に、岡部さんはご自宅に高橋悦堂さんというお坊さんと呼ばれています。お二人の間にそういう約束があったからです。

実は、これには目的が二つありました。一つは、今のお坊さんは死を扱いながら、葬式仏教になってしまったために、人が死んでいくところを見たことがない。人の死を見ないで死を語れるはずがない。だから、俺が死んでいくところをしっかりと見ろ、というものでした。

もう一つは、私自身が岡部さんに言ったことがきっかけでした。

「臨床宗教師の素晴らしさはよくわかりましたが、生前にお坊さんが来るのは、何となく縁起でもないと感じ止める感覚があるのだから、患者さんのところにお坊さんがあらわれて、本当に喜ばれるでしょうか」

おそらく岡部さんも同じように思っていたのでしょう。

「おれだってわからねえよ。じゃ、おれの体で試してみるか」、

臨床宗教師が受け入れられるかどうか、実験してみようということです。いかにも岡部さんらしい発想です。

結論から申し上げますと、私が心配したことなどまったく杞憂にすぎず、これまでにないご家族の穏やかそうな表情を見て驚きました。岡部さんが穏やかだったかどうかはわかりません。そのことは聞かずじまいでしたから。でも私が感じたのは、悦堂さんがいるこ

とで、岡部家全体が非常に落ち着いていたことです。これまで30回以上、ご自宅を訪れていますが、あの清明でたゆたうような雰囲気は初めてでした。

悦堂さんがご家族に何かをしゃべったからではありません。悦堂さんがそこにいてだけで落ち着いていたのです。そのとき私は、ああ、これが臨床宗教師なのだと、いっぺんに腑に落ちました。

後日、私は悦堂さんに、私が死ぬときも頼みたいとお願いしたほどです。

ここまでの前段です。実は、岡部さんの炯眼は、臨床宗教師が死にゆく人やそのご家族を安らかにすることだけではなかったのだと思います。

大津のいじめ事件があったときでした。私は岡部さんと議論したのですが、なぜいじめが起こるのかについて、私が、昔は親父や近所の人といった怖いものがあったし、先生も怖かった。そういう怖いものがたくさんあったからではないか、と言いました。すると岡部さんは、それだけじゃないんだと言うのです。

「ご先祖様に申し訳ない」、「死んだ親父に怒られる」といった、死後世界から見つめられている感覚が日本人の倫理の基盤になっていたんだ。それなのに、戦後の日本人は「あの世この世」観を失って、倫理までなくしてしまった。

おれのガキの頃にもいじめはあったが、大津のいじめ事件のような凄惨ないじめにはならなかったのは、お寺の裏には「あの世」があり、怖い闇の世界がいっぱいあって、「そんなバカなことをやってると連れて行かれるぞ」と言われたら怖かったのだ。死後世界か

ら見られている怯えのような感覚が子供の倫理形成をしていたんだ。それなのに、あの世を失って倫理までなくしたから、死ぬまでいじめるんだ。日本人の「恥の文化」も、「警察は怖くないけど、あの世に逝ったらご先祖様に申し訳が立たない」といった感覚から生まれたんじゃないか――。

「あの世を失って日本人の倫理まで壊れたことが、戦後最大の事件なんだ」と言われたことが、いまでも強い印象として残っています。

その結果、どうなったかといえば、我欲だけが残ったのです。だから、おバカな政治家ばかりあらわれるし、相手が死ぬまでいじめる子供があらわれる。倫理は宗教的基盤に支えられていることを、日本人はすっかり忘れてしまったのです。

岡部さんは、もう一度、「あの世この世」観を再生して、倫理性を取り戻さなければ、この国に未来はない。それには「お迎え」をベースに、まず死を見つめることで、臨床宗教師はその伝道師でもあると言われました。看取りの文化を取り戻して日本人の倫理を再生させるのだから、臨床宗教師は社会運動家なのだ、と。

私にとってはなにもかも腑に落ちました。その一言一言を思い出すたびに、今も胸が熱くなります。

出会いと別れを回顧して「追悼文」を書く

「心の相談室」室長補佐 川上直哉

岡部健先生の追悼文を書くように、との要請を頂いてから、ずいぶん時間が経った。まったく、書くことができない自分がいた。

こんなことは、初めてである。

先日、鎌倉で、一つの話聴いた。気仙沼出身の学者の話であった。学者氏は、ご母堂様を津波で亡くされた。遺体安置所を回るなかで、それらしい遺体の写真を見つけた。しかし、そのご遺体そのものを、その時確認しなかった。後日、DNA鑑定の結果、ご母堂様と推定される遺体についての連絡があった。遺留品から本人と知った。そのご遺体の写真は、あの安置所で見た写真と、同じであったという。

学者氏は語る。おそらく、安置所を回った時の自分は、母親の死を確認したくなかったのだろう、と。どこかできっと生きていけると期待していたのだろう、と。

私は今、安置所を回っているときの学者氏の思いを分有しているような気がする。だから、岡部さんの追悼文を、私は書きたくない。

岡部さんは、きっと、まだ体調がすぐれず、会うことが困難だけなのではないか。もう少ししたら、また気候が良くなったら、次の春になったら、きっと、また会えるのではないか。

しかしそれはない。それはない。

私はお通夜の式に参列したのだ。棺桶の中に眠る硬くなったご遺体を見たのだ。岡部健氏は、確かに、亡くなったのだ――このことを、私は書きたくなかった。

鎌倉で話をしていた学者氏は、もう一つ印象に残ることをお話になっていた。被災者は、今でも、二つの時間を生きている、と。一つは、「震災が無かったら」とい

う時間。それは永遠に失われた時間。もう一つは、現実の時間。それは、震災後の日常という時間。

私見であるが、おそらく、永遠に失われた「震災前の時間」に憧れる、ということはない。「失われた」という事実だけが、圧倒的な存在感を示して、そこにある。柔らかな憧れは吹き飛ぶ。震災後の日常は、日々の常態として、ここにある。圧倒的な常態として、ここにある。そして、その影のように、ぽっかり空いた穴のように、失われた時間が、そこにある。注意深く自らを内観して、そう思う。

岡部さんとお会いしたのは、震災前だった。宮城県宗教学法人連絡協議会法人研修会の関係で、あるいは、教会の大長老の牧師の紹介を頂いて、「仙台タナトロジー研究会」に参加して、私は岡部さんに出会った。既に癌に病み、スカイプを使って声だけの参加をなさっていた。ときどき、体を伴って参加もされていた。たまに、一緒に二次会（呑み会）に行けた。変わった医師。刺激的な人物。すこし、雲の上の人。

震災があった。私の生活は一変した。私は主夫だった。学位を取得し、大学の非常勤講師というプレカリアートとなり、働く妻を支え、娘を0歳児から育てていた。毎日公園に行き、保育園に行き、何者でもない自分の自由さを喜んでいた。一生、このまま隠者として生きていくのだろうと、大げさに言えば、諦念を抱いていた。

そこに、震災があった。隠者としての生活は吹き飛んだ。生活は一変した。私は仙台キリスト教連合の震災対応部門の担当者を仰せつかった。世界中から寄せられる善意を引き受ける係。その仕事の

中で、無数の苦しみと向き合う日々を過ごした。巨大な津波を前に徒手空拳のまま向き合っているような、そんな異常な情緒の日々。

無数の生者を支える働きに携わった。そして、その背後に、無数の死者があることを思わされた。原発も爆発した。世界は混乱の中にあつた。

死者への対応はどうするのか。仲間から問われた。近親者を看取れなかった人々、その膨大な魂の痛みをどうするのか。自ら問う中で、岡部さんが語っていたことを思いだした。宗教者は何をしているのか、必要としている場所にいないではないか、と、そう語っていたことを、思い出した。

私は、仙台キリスト教連合の名前を用いて、できることを探した。仙台仏教会の果敢な取り組みを知らされた。協働を、許された。

すぐに私は岡部さんに電話をする。電話口で、意外なほどの覇気を込めて、「遅い」と叱られた。「そもそもこれから、人が病院の外で大量に亡くなる時代が来る以上、その時の備えをしなければならなかった。しかし、手遅れであったのかもしれない。今、人が大量に亡くなった。津波の前に、医師は無力だった。もう手遅れかもしれない。しかし・・・」。

電話で聞いた言葉の響きは、今でも忘れられないものとして、耳に残っている。「俺は、できることは何でもするよ」と、はっきりそう宣言された。

宮城県宗教学法人連絡協議会のお力を借り、仙台市のご理解を得て、火葬場にて「心の相談室」が

立ち上がった。毎日、その現場に座った。死者が来る。何もできない自分が、ただ「相談室」に座っている。諸宗教者と行政との連携を慎重に保つ連絡役。その現場に、岡部さんはやってきた。吸い寄せられるように、谷山さんもやってきた。殿平さんもやってきた。鈴木さんもやってきた。そして、WCRPを背負って篠原さんも。

金田さんをはじめとするCafé de Monkの皆さん、そしてだいぶ後になって、伊藤文雄牧師。みな、岡部さんの夢に惹き寄せられた。

考えてみれば、この時の岡部さんは、余命を宣告された体だった。まさに「余生」を生きていた。末期の夢。ただし、日本を変えるような、大きな夢。それが、渦になって私たちを巻き込んだ。そして、「心の相談室」ができた。「ラジオ番組と電話相談」が始まった。そして、「実践宗教学寄附講座」ができた。

今、岡部さんはいなくなった。夢は醒めたのか。幻と消えたのか。

「医者にできないことを担ってほしい。宗教者にしかできないことがある。自信を以て現場に立て。」そう叱咤激励する声が聞こえる。では岡部先生、宗教者は、どこに立てばよいのですか——問うても、答えは返ってこない。

いや、返ってきているのではないか。

すべてが前進する最中であって、現実には岩盤のように立ちふさがっていた。それが震災前の時間だった。現実の岩盤の前で足踏みをしていた岡部さんは、震災に「手遅れ」を思った。しかし、そこからすべてが始まった。

火葬場で、無力を曝してただ座っていた現場に、全てが集まってきた。無力の現場には、無限の力が宿

る。しかし、無力の現場に佇むことは、耐えがたい不安を引き受けることだ。誰に、それができるというのか。

「できること」ではなく「できないこと」を抱きしめる。そして無根拠に、手がかりもなく、しかし断固として、現場に祝意を述べ、希望を宣言する。すべては「手遅れ」から始まると思ひなし、絶望の淵で踏みとどまる。

それは、宗教者にできることだ。それができれば、他の人は宗教者の存在を足掛かりに、希望へと一歩を踏み出せる。

絶望の淵で踏みとどまること。その実践をどう確保するのか。その確保に宗教がどう機能しているのか。この問を淵源として、「実践宗教学」という言葉の輝きが薫る。

今、私は自分の無力さと向き合っている。岡部さんは亡くなった。岡部さんはもういない。「いない」という現実が「ある」。この矛盾。耐えがたい矛盾。しかしこの矛盾に、巨大な力がある。無力さを抱きしめることができるなら、その力を引き出せる。

出会いと別れを回顧して、今、岡部さんの言葉を反芻する。そこに、新しい岡部さんとの出会いが立ち上がる。

絶望の淵に立つ思いで、ここに、岡部さんへの追悼文を書いた。ここにきっと、新しい明日への足掛かりがある。今ようやく、そんな気がしてきた。

岡部健先生追悼文

曹洞宗普門寺 高橋悦堂

八月下旬、岡部先生に会う最後の機会かも知れないと、金田諦応師と

共に岡部村を訪問した。帰り際、先生から「悦堂！オマエ、俺の最期を看取れ！」と言われた。突然で戸惑いもあった。「人が死の不安を解消し、安らかな最期を迎える為には宗教者の存在が不可欠」という考えを担ってゆく宗教者達の姿を、先生は私に重ね見ていたのだ。

「俺の死をじっくり観察して、これからに活かせ。仏教は徹底した死の観察から始まったんじゃないのか。」

その後、爽秋会の小西達也氏と週二回ほど面会し、最後はご自宅に泊まりこみ観察を続けるようにと言われた。皮膚と骨が張り付きまるで釈迦の苦行時の様に痩せた身体。饒舌であった先生が言葉を失い、徐々に意識が落ちていくなかで、それでも瞳は求道者の如き輝きを失う事はなかった。亡くなられる二日前の夜、先生が言葉にならない声をあげ両手を突き出すと、ベッドの両端に座って居られたご家族がその手を優しく握られた。その時の先生の穏やかで安心された顔を、忘れる事が出来ない。

道元禅師は「この生死はすなわち佛の御いのちなり」と言われ、先生は「人は大きな自然の生命の中にぶら下がっている。俺もそれと一つになるんだ。」と言われた。生死は己を超えたものだ。いずれ私も至るその時に「よくやったじゃねえか」と先生に迎えて頂けるよう精進する事で、その死を観察させて頂いた恩に報いたいと思う。

岡部先生追悼文

爽秋会岡部医院チャプレン 小西達也

岡部健先生の追悼文を、ということであるが、ここでは、これまであまり表に出ることのなかった「臨床宗教師」誕生秘話と、岡部先生の最期のご様子について披露させて頂きたい。長文・悪文をご容赦頂きたい。大変僭越ながら、そこには岡部先生と私の出会いが深く関わっている。

私が岡部先生と初めてお会いしたのは、当時、東大にいらした河正子先生が、東北大学にいらした（現・静岡大学の）竹之内裕文先生をご紹介してくださったことに端を発する。竹之内先生はそのご紹介を受け、東北大学と岡部医院で共同開催のタナトロジー研究会で発表する機会を私に与えて下さった。2005年9月1日のことである。そこで私は「スピリチュアルケア」について話をさせて頂いた。その後、岡部先生の行きつけの飲み屋さんに席を移し、スピリチュアルケアについての話で大変盛り上がったことを記憶している。

そして翌年も、またタナトロジー研究会に呼んで下さった。2006年6月27日。その時は「チャプレン」と題してお話させて頂いた。この頃から、岡部先生はこのチャプレンに関心を深めて行かれたようだ（この辺りの経緯については竹之内先生が詳しい）。この発表後の席でも、岡部先生は「緩和にはチャプレンが必要だ」「うちでも雇えないか」といった話をされていた。しかし同時に「『チャプレン』という英語は何とかならないのかな〜。」「小西くんさ〜、日本語なんとか考えろよ」とのことだった。しかし私の怠慢で、この宿題に対して、私は結局お答えせずじまいで、最終的には昨年、岡部先生ご自身が「臨床宗教師」とい

う言葉を考えつかれることになった。

この頃、私は米国大学院留学中で、夏休み期間に日本に帰国、岡部先生に「岡部医院で、在宅のチャプレンを試しにやらせて頂きたい」とお願いしたことがある。岡部先生はそれを快く引き受けて下さり、現在の岡部医院二日町診療所に宿泊させて頂き、自動車も貸して頂き、在宅緩和ケアでのスピリチュアルケアを試みた。そこで得られた知見は、後述の爽秋会カンファレンスで披露させて頂いた。岡部先生は、その後もチャプレンに対するこだわりを持ち続けられ、ドイツで長年チャプレンをされていた安井猛先生とおつきあいを始めたこと、そして更には臨床心理士で僧侶でもいられる大村哲夫さんがチャプレンとして岡部医院でご活躍され始めたことを伺った。

そして2008年2月9日にも岡部医院に呼んで頂き、同院主催の「爽秋会カンファレンス」なるシンポジウムでパネリストを務めさせて頂いた。その時には「日／米、施設型／在宅型ホスピスでの経験を通じてスピリチュアル・ケアを考える」と題してお話しさせて頂き、「チャプレンは病院では極めて有効だが、在宅では効率その他の理由で非常に難しい」「効率的に、むしろその患者さんのお宅の地域の宗教者の方にチャプレンとしてスピリチュアルケアして頂く方が有効と思われる」といった提言をさせて頂いた。その後、岡部先生から、大村さんに対して地域の宗教者との連携するようアドバイスされていると伺った。

そして2011年3月11日には、東日本大震災が起きた。私は当時、大阪の上智大学グリーンケア研究所に勤務していたが、被災地支援の一端を担わせて頂くべく、同じく同研究所

で教鞭を取っている大阪・願生寺副住職の大河内大博先生と4月末に気仙沼に入ったが、その際27日に名取の岡部医院にお見舞いに立ち寄らせて頂いた。岡部先生は車で閑上地区等をご案内下さった。その時に、岡部先生から「臨床宗教師」という言葉を初めてきいた。とってもすばらしい言葉だと感じた。その翌日から私たちは気仙沼の中学校の体育館で寝泊まりしながら心のケアを通じたささやかな支援活動に携わらせて頂いていたが、夜、体育館の2F部分で寝るときに、大河内先生と「岡部先生のおっしゃった『臨床宗教師』というネーミング、とってもいいよね〜。『臨床』をつけたのもいい、それに『宗教師』の『師』というのも、僧侶を『師』と呼ぶのとも親和性があるし、すばらしいよね」と語り合ったことを記憶している。

その後、「心の相談室」の活動が始まり、また今年の4月からは、東北大学で、実践宗教学寄附講座が立ち上がるとのことで、1月末頃、「こっちに来て（一緒にやろう）」とのお電話を岡部先生から頂いた。その時私は「私はどちらかというと、東京での活動に関心がある」「東京のような、伝統的な宗教やコミュニティが残っていないところでの臨床宗教師活動こそが、日本にとって最大の課題であり、私はそちらに関心がある」などと偉そうなことを申し上げた。それに対して岡部先生は「仙台だって、都会だぞ〜。東北一の都会だぞ。まあ、いいから、とにかくこっちに来て！」とのことであつた。結局、私はチャプレンとして岡部医院に籍をおきながら、ささやかながら活動に関わることになった。実践宗教学寄附講座は、鈴木岩弓先生を中心として、また新たに谷山先生と高橋先生が来られ、更に

は川上直哉先生や金田諦応先生をはじめとするすばらしい宗教者の皆さんが中心となってスタートした。僭越ながら、よくもこれだけの人材が集まったものだと思う。

しかし一方で、9月27日には、その最大の立役者である岡部先生ご本人が亡くなられた。私が仙台に移ることを決めた時には、もちろん、岡部先生の予後のことは存じ上げていた。その上での来仙の決断であった。いや、私が仙台に来た意味は、むしろそこにもあったと思う。岡部先生は、最期の数週間、高橋悦堂さんという若い優秀な僧侶に対して「今の宗教者は看取りを経験する機会がない」「自分が死んでいくプロセスをしっかりと観察するように」とおっしゃり、最期の最後まで自宅に通うように指示され、同時に小西にそのスーパーヴァイザーとして同行することを求められた。これは臨床宗教師研修の実習（実習の宗教者と、そのスーパーヴァイザーをチャプレンがする）のいわば第一号であった。岡部先生はもちろん、そのことを意識されていた。先生は、最期、ご家族と本当にいい時間を過ごされた。先生は最後まで熱心に道を求められていたご様子であった。亡くなられる5日くらい前から、それまで日常的に見られた、大変真面目な表情から一転、とても陽気になられ、横たわって目を閉じつつも、頻繁に笑顔を見させられるようになられた。そして「変わる、変わる」「人は変わる」という言葉を独り言のように繰り返されていた。私はそれを、人間が最期に変容することをおっしゃろうとしているものと解釈した。

亡くなられた9月27日の当日の午前中も私はご自宅にお邪魔していたが、京都での学会の事務局としての役割を果たすために、昼過ぎにはご自宅を離れなければならなかった。先生は既に言葉をかけても返事されない状態であり、私が学会から帰ってくる4日後の月曜日までは正直、厳しいと感じていた。私は、先生にしっかりと挨拶すべきと考えた。そしてお宅を離れる際

に、ベッドの先生のお顔のそばで、ご挨拶申し上げた。シンプルに「先生、小西です。失礼します」とだけ申し上げた。それに対して岡部先生はなんと、いつも私に対してされていたように「おう！」とご返事された。これには周りの私達もびっくりした。しかしその約6時間後、息を引き取られたとのことであった。岡部健先生のご冥福をお祈り致します。

2012年11月5日

在宅緩和ケアの岡部先生

医療法人社団爽秋会 相澤 出

ご遺族へのインタビューの最中、先生の往診に偶然立ち会ったことがある。相手のご遺族がたまたま先生の担当患者さんだった。「調子はどうだい？お、顔色いいね」と患者さんに声をかける。ひととおりの診察がおわると、近所の山の話になる。「この辺ではもうすぐ～って山菜が出んの。けどマムシも出っから注意してね」「そうかあ」とやりとりがある。そのあと診療所で先生に「あのばあちゃんの家、の玄関に～というお札がはってあったけど、あれはどういう神社だ？何かの講があんのか？」という質問をぶつけられた。スタッフにきけばそこに限らず、こういうやりとりは先生と患者さんの間ではいつものこと。先生は患者さんを患者としてだけでなく、そのご自宅、地域で暮らしてきた人としてとらえておられた。観察は生活の姿、それを作り上げた歴史の積み重ねにまで及んだ。「お迎え」体験も、生活全体に及ぶ観察のなかで見出されたものであった。緩和ケアはトータルなケアだが、先生の場合それは理念にとどまらず、生活をする具体的な個々の人への本気の関心に根差しており、医療も介護も経済問題も地域の具体的なあり様も含めた上でのケアであった。その具体的な全体のかに、宗教性に向けられた関心もあった。周知のように日本の医療は圧倒的に大病院の感覚が支配する「医療化」された世界である。その枠をいち早く突破し、生活を支え

るケアを目指すなかで「お迎え」への注目があつた。臨床宗教師の希求もあつた。生活と共にある在宅緩和ケアのあり方、そこでの臨床宗教師のあり方はどうあるべきか。我々は先生からの宿題に、在宅緩和ケアを手作りで切り拓いた先生のように試行錯誤し、答えを創りだされねばならない。

追悼文

伊藤文雄

岡部 健 先生

先生に出会うことができた幸いを感謝しています。もはや見える関係でお会いすることは叶わなくなりましたが、私はいまだに先生と川上直哉先生と三人でロイヤル・ホストで話し合っている感じが続いています。先生が緊迫感をもって語ってくださったことは、私の生涯の課題として受け止めていただいております。先生の貢献は計り知れない大きさ、深さ、広がりがあります。先生の志は着実に実現されつつあります。「臨床宗教師」講座の若き第一回研修者たちが大きな成果と幻を携えて、各地に散って行きました。自分たちが、公共性を持った社会資源としての宗教者の一人であるという自覚を持って。力強い限りです。

この講座を準備していた時、「それだったら、自分でもできる」と先生は決然と仰いましたね。この言葉をしっかりと受け止めていただきます。「宗教」の意義と責任は、歴史的社会的視点から検証され、現場に臨みつつ、具体的に明確化されなければなりません。その中で、宗教間対話も進めていかなければなりません。今回の研修を見て、「これは宗教改革だ」と言った人がいます。まさに、そうだと思います。今、多次元で「境」を越えることが起こっているのですから、しっかりと対応しなければなりません。先生の預言者的なご指導に心から感謝しています。ありがとうございます。目と目で再びお会いする時まで。どうぞ、見守っててください。合掌

追悼文

「自然のスピリチュアリティ」について
心の相談室理事 桜井恭仁

岡部さんとは、震災の後2011年5月から体調が悪くなるまでの1年間ほど、彼が運転する大型のRV車で月に1、2回は被災地に出かけ、肩を並べて同じ光景を見ていました。

彼は、津波で流されて何もかもなくなってしまった、荒涼とした亘理の荒浜に立ったときの感慨を、この8月に訪ねてきた友人の医師らに次のように語ったそうです。

亘理荒浜の被災地に立った時に感じたのは、「合理的にものを考えられる場所も、空間も、時間もない、まるで空襲で爆撃を受けた様な状況」だった。そこに自分の身を曝したら、「ああ、人間と言うのは大きな存在にぶら下がって生きているんだな。個人が集めると人間になるんじゃないんだ。実は逆なんじゃないか」と思った。この想いは、考えて、得たものではない。ふっと湧いてきた。「あそうか!」と体にストンと落ちてきた。あの場では、物を考えるはずの自我そのものが破綻していた。

破綻した時に何が人間の心を支えられたのか、と言ったら、人間とは大きな命に繋がっているもんなんだ。俺が死ぬなんて事は、本当にちっぽけな事なんだ、という様な事が、リアルな感覚として自らの中から湧き出てきた。同じような光景に私は「原爆の後のヒロシマの写真のようだ」①という応答をした覚えはあるが、「そこに自分の・・・」以下の感慨はまったくありませんでした。

医師である彼は、自分の余命を年、いや月単位で予測していたのでしよう。命に対する感受性が研ぎ澄まされていた「末期の目」には、何もなくなった地上とその向こうに何事もなかったようにたゆたっている海原の光景が、近く消滅すると予測している彼自身の状況と重なって、「ストンと落ちてきた」のかも知れません。

自分が死ぬことなど全く実感していない私には、そのような彼の心境を推察できませんでした。重病の病み上が

りにかかわらず、2時間近くの運転にも平気のようなので、ずいぶん元気なんだと思っていたのですから相当な「鈍感力」でした。因みに彼は「震災リハビリ」と称していました。

スピリチュアリティについて、私が現在最も納得しているのは広井良典さんの「神の多様性」についての次の説明です。

「『自然のスピリチュアリティ』とも呼ぶべき、自然の諸事物の中に、単なる物質的なものを超えた何かを見出すような感覚ないし世界観がもっとも基底にあり、そうした原型が、地球上の各地域において異なる形に変容しつつ多様な『神』として生成するという理解である。」②

荒浜海岸での岡部さんの感慨は、前段の「感覚ないし世界観」に相当するものなのでしょう。このことに関連して、40年ほど前に読んだ『夜と霧』の有名な一場面、ナチスの収容所で空腹と疲労、ガス室の恐怖で日々死に向かいあっていた人たちが、夕焼けに感動するという次の場面を思い出しましたが、これらは共通する感覚のように思います。

「そして我々はそれから外で、西方の暗く燃え上がる空を眺め、また幻想的な形と青銅色から真紅の色までのこの世ならぬ色彩とをもった様々な変化をする雲を見た。そしてその下にそれと対照的に収容所の荒涼とした灰色の掘立小屋と泥だらけの点呼場があり、その水溜りはまだ燃える空が映っていた。感動の沈黙が数分続いた後に、誰かが他の人に『世界ってどうしてこう綺麗なんだろう』と尋ねる声が聞こえた。」③

天上の壮麗と地上の惨状の狭間に立つという構図では、金田さんが、津波で市街地が壊滅した志津川からの帰り道、真紅に輝く夕日に涙し、満天の星の輝きを観て「仏教もキリスト教も（区別は・筆者）ない!」と感じたという感覚とも共通であろうと思います。

ちよつと筆を滑らせれば、その様な狭間で、天上を恨まず、地上に絶望す

ることなくすつくと立つというのが、古来「宗教者」の姿でしょうか。

岡部さんが代表であった我々の「心の相談室」の活動もここ、先の広井さんの指摘する、様々な宗教・宗派が生成される前の宗教的感情の「基底」が出発点であり、だからこそ具体的な場面での「宗教・宗派を越（超）えて」の活動が可能となったのでしよう。

このようなことは、今回の臨床宗教師研修に参加されて、荒天の中、被災地を行脚された皆様も感じられたのではないかと思います。

8月25日に岡部さんの山荘を訪ねていらっしやって、大いに話が盛り上がった大井玄先生の本を読んでいたら、「今日は死ぬのにもってこいの日だ」というプエブロインディアンの老人が謳った詩が引用されていました。④

岡部さんも、来訪者が帰り、奥さんが夕餉の支度に向かい、息子さんが浴室でシャワーを遣うという極くごく日常的な時間の流れの中で、「もってこいの日だ」思い、安堵して息を引き取られたのでしよう。その顔は実に穏やかで、深い、深い思索を続けておられるようでありました。

これは追悼ではありません。40年ほど前に、廃屋と見紛うばかりの学生寮の一室で始まった彼との対話の継続です。一路平安 再見

<註記>

①立花隆さんによれば、今回の地震のエネルギーはヒロシマ原爆の3万2千発分だそうだからあながちの外れでもなかったのだでしょう（『文藝春秋』2011.5）

②広井良典（2009）『グローバル定常型社会 地球社会の理論のために』、岩波書店、157頁

③V.E フランクル（霜山徳爾訳）『夜と霧』、みすず書房、127頁

④大井玄（2008）『「痴呆老人」は何を見ているか』、新潮新書、187頁

因みに同じ本（ナンシー・ウッド『今日は死ぬのにもってこいの日』）が、今年3月に亡くなられた吉本隆明さんの『アフリカの段階について』（2006、春秋社、54頁）で引用されていて、その序文で曰く、「この論考にとっては、『アフリカの段階』を人類史のいちばん多様な可能性をもつ母系（母胎）とし掘り下げ、この掘り下

げの方法は同時に歴史の未来にとって最大の射程をもつものとみなすことになった。」

これがどういう意味なのか、どなたか教えていただければあり難い。

追悼のこぼ

竹駒神社権禰宜 佐藤央千

岡部先生との出会いは、昨年八月二十二日に開催された心の相談室実務者会議の席でした。

私が初めて参加したこの会議の中で、先生の思いを知りました。

その時から、この歌が今も頭からはなれません。

「釈迦孔子も 神にしあればその道も
ひろけき神の道の枝道」(宣長)

先生の思いを胸に、一步一步、心の相談室の活動の更なる発展に向けて歩を進めて行く覚悟です。

岡部健先生のご冥福を心からお祈り致します。

岡部先生の一言

WCRP日本委員会仙台事務所所長

篠原祥哲

東日本大震災の発生後、私はWCRP日本委員会のスタッフとして緊急支援に取り組んでいた。関連団体から頂いた浄財を活用し、現地のニーズに沿った支援内容を決定するため、頻繁に事務所と自宅がある東京から東北の被災地に通っていた。そんな東北訪問の中で初めて岡部先生にお会いしたのが11年8月であった。その時はWCRPの支援を紹介させて頂き、また岡部先生から被災者支援における宗教者の役割の必要性について伺った。その最初の出会いの時に、私は「やはり被災者支援をするには、現地に近いところにいる必要があるのではと思っています」と何となく岡部先生に話をさせて頂いた。その頃、私は、今後WCRPが被災地支援を本気になって実施していくのであれば、被災地の近くに事務所を設けて現地の方々とコミュニケーション

を密にしていかなければならないのではないかと思っていた。しかし、その場合その事務所には私が行くべきか、私の家族(妻、小学2年生の息子、3歳の娘)はどうするか等々、正直、迷っていた時期でもあった。そのため、岡部先生には、「何となく」、現地事務所の必要性について話をしたに過ぎなかった。

その2ヶ月後、ある仙台で開催された学習会の会場で、偶然岡部先生に再会した。「おう、来てたのか」と声をかけて下さり、わずか数十秒であったが立ち話をした。その時、岡部先生から「仙台に来れることになったか」と問われた。私は、岡部先生が私のことやさらに仙台事務所の可能性についても覚えて下さったことに驚き、咄嗟に「そのつもりで準備しています」と答えた。その頃はまさに仙台行きに関して、WCRPと家族内で調整している最中であり、まだ決定もしておらず、場合によってはこの話はなくなる可能性もあった。

今思うと、そのタイミングで岡部先生に声をかけて頂いたことは、私にとって絶妙のはからいであった。あの岡部先生の「仙台に来れることになったか」の発言は、私にその決意と覚悟を私自身が改めて問うことを迫るものであったと同時に、「仙台で一緒にやろう」という何か温かい岡部先生の優しい配慮と期待を強く感じた。また安心も感じる事ができた。その後、私も決心がかたまり、今は家族と共に仙台に移り、WCRP仙台事務所として震災復興のお手伝いをさせて頂く手配を頂いた。これもあの岡部先生の一言によるものが大きい。私も、岡部先生から頂いたあの一言を、ほんの少しでも真似ができる自分になれるよう改めて精進を誓いたい。

趣味人の玩具

東北大学文学研究科

コンピュータ室助教

桐原健真

「キリハラ、どうだ、コレ」——こう、岡部先生が言うときは、たいてい

何か新しい玩具を手に入れたときである。玩具と言っても無論子供のそれではない。ガジェットと言われるタブレットPCやモバイル端末などの電腦小物のことである。先生の一押しは、キングジムのポメラという折り畳み型のワープロ。通信機能もカメラも無く、ただ日本語を書くことに特化したストイックなところが、先生のお気に召したようであった。「コレがあれば、新幹線の中でも原稿が書ける」と、先生はおっしゃっていたが、事実、講演や会議などで日本中を飛び回る際には、こうしたツールが大活躍したに違いない。

私自身は本来文系の研究者なのだが、紆余曲折があり、十年以上にわたって大学のネットワークを管理している。その関係もあって、こうした玩具は好物なのだが、自分の安月給ではそう野放図に買えるものでもない(趣味人の玩具は高いのである)。そういう人間に「最近買った玩具」を見せる訳であるから、岡部先生もお人が悪いと言えは悪い。

とは言え、最新のブツを手にするのは、こういう人間にとってはまったく有難いことで、「ああいいなあ。コレいいなあ。すごいですね、コレ、イヤ本当に」と字面で書くとなんとも頭の悪い発言を繰り返しながら、当方はお借りしたご自慢のブツをなで回すことになる。岡部先生は、そんな当方の様子を見ると、「なあ、キリハラに見せると、いい反応するんだよ」と、少々ご満悦気味におっしゃったものである。

1年3カ月

日本バプテスト連盟

南光台キリスト教会牧師

井形英絵

岡部先生に顔を合わせてお会いしたのは、震災後の6月2日、南三陸町志津川細浦での出張傾聴カフェ「カフェデ モンク」でした。300メートル先には流されてしまった集落が見える高台の、数日前まで80人余りの人が避難生活していた工場でのカフェでした。被

災された方に出会うということ、加えて初めて宗教間協力の被災支援に加えていただくということで、とても緊張して向かったのを覚えています。

そこに岡部先生がおられました。お坊さん、ボランティアの方々、被災された住民の人々の中に、カメラを下げて「自由人」の雰囲気です。5月に新しい枠組みで始まった「心の相談室」の室長となって下さったお医者さんと紹介を受けご挨拶させていただきました。

岡部先生を思い出すときにあの時の先生のたたずまいを思い出します。その場に来て、その場において、そこで起こっていることに身を傾けて聴き観察し、その場にいる人たちと言葉を交わす、そんな姿です。それ以来、毎月11日の身元不明者の追悼の場、傾聴カフェ、電話相談の研修会、「心の相談室」の会議、寄附講座立ち上げの話合いなど、先生はできるかぎりそこにいて下さいました。先生はいつも「現場」におられました。場を作り、場を支えて下さいました。宗教者に問いを投げかけ押し出して下さいました。

「未曾有の死者・不明者が出て喪失に苦しむ人々のところへ、今出なくていつ出るのだ」「科学者である医療者にはできないことがある、宗教者にしかできないことがある」と。

今、岡部先生のご生涯の最後の1年3カ月に触れさせていただいた重みを感じています。未だ心中は残念、後悔、感謝と複雑です。しかし、先生が伝えて下さった問いと期待にこれからも押し出され、手さぐりながら応答して行きたいと思います。岡部先生、ありがとうございました。

臨床宗教師のあり方

東北大学准教授 谷山洋三

岡部先生、人生の旅路を終えられて、お疲れ様でした。決して長いとは言えないでしょうが、密度の濃い、深い人生を歩まれたものと拝察します。

震災後、「心の相談室」のことで葛岡にて川上牧師にお会いした際、岡部

先生が来られたときには驚きました。

「どうして宗教者の集まりに岡部先生が関係しているのかなあ？」と思いましたが、「お迎え」現象の研究もされており、チャプレンについても理解のある希有なお医者さんですから、納得できます。

チャプレンの邦訳について、「ストレートに表現しなきゃダメだ」と、“臨床宗教師”を提唱されました。そして、臨床宗教師のあり方について、「心理士と同じようなことをしちゃう意味がない」と、強行に主張された時にはかなり抵抗感がありましたが、結局、岡部先生の主張が正しかったのでしょう。宗教界、宗教学界をはじめ、想像をこえた反響があります。

先月の研修にも遺影という形でしたが、行脚にもカフェデモンクにも参加していただき、ありがとうございました。今後も見守っていただき、何かの機会には何らかの方法でご意見をいただけると期待しています。

追悼文

東北大学准教授 高橋 原

開口一番、岡部先生は「やっぱりユングじゃなきゃダメだと思うんだよね」と言われたように思う。震災後に集合的無意識の内容が一気に噴き出したということもおっしゃられ、私はなぜ自分が仙台に呼ばれることになったのかわかり始めた。しかしまだこの老人のような、叔父さんのような、不良の先輩のような人が誰なのかはよくわからなかった。

四月の初めに、まだ臨床宗教師のコンセプトが曖昧模糊としていた時期に、吹雪の作並温泉で行われた会議の席上で、岡部先生は「それって心理でしょ」と発言され、ここで大きく舵が切られたように思われる。すなわち、心理学的アプローチではなく「宗教」を前面に出して人々に接していく人材を育てるという方向性が決まった。ようやく、アンテナの鈍い私にも、すべてのことの首謀者はこの人であり、自分は岡部丸という名前の船に乗り込んだらしいとわかってきた。

八月にご自宅にうかがった時には、来る人来る人に「先生、お迎えは来ましたか？」と質問されることに辟易していたそうであるが、それでも嬉しそうに「お袋には会いたくねえな」と岡部節で答えてくださった。先生は人類がある時期に死者のお迎えを通してあの世の存在を認識したことで宗教が発生したという大きなヴィジョンをもっておられたようで、そこからユングの思想に興味を持たれ、また柳田・折口論争に触発されて、「平成の遠野物語をやったらどうだい」などと半信半疑の私を挑発してくださった。幽霊話の収集に関わるこの方面は爽秋会の相澤出さん達の助けを借りながら形にしていければと考えている。

柿ピーを頬張りながらしゃべる先生のシャツのボタンがかけ違えられており、私はそれが可笑しくて黙って何回もシャッターを切った。ドアの向こうの空間に「おい、飯！」と叫んだ先生は、なんと食欲旺盛で、ウニクリームスパゲッティを所望されたが、そういう立ち居振る舞いのいちいちに滑稽味が感じられた。どうもクマがお迎えに来たらしいとか、あれほど看取りを言いながら、みんなが目を離した隙にこっそり逝ってしまうという演出も含めて、実にサービス精神の旺盛な方だったと今にして思う。

岡部健先生の業績と最後の日々が取り上げられたメディア情報を紹介します。

NHKこころの時代「シリーズ私にとっての3.11」2011年11月10日放送

Date FM(FM仙台)Café de Monk
2011年11月15日 (youtubeで視聴可)

奥野修司「緩和ケア医師『余命十カ月の決断』」『文藝春秋』2012年6月号

奥野修司「死の床で見る「お迎え現象」調査報告」『文藝春秋』2012年7月号

NHK クローズアップ現代「天国からの「お迎え」～看取りが問いかけるもの～」2012年8月29日放送

「死の床の医師と宗教学者「感動の対話」死の六日前、医師が「盟友」に伝えたかったこと」『文藝春秋』2012年12月号

第一回臨床宗教師研修・前半を終えて

実践宗教学寄附講座主催、第一回臨床宗教師の前半が終了しました。いずれ研修後半と合わせて全体としての総括を行なうこととなりますが、以下に前半プログラムの内容の概要をご報告するとともに、前半を終えた時点で受講生より寄せられた感想文を紹介させていただきます。またこの場を借りて、研修にご協力頂いたカフェデモンク関係者の皆様、石巻市の地元の僧侶の皆様、会場をお貸しくださった石巻山城町教会、YMCA石巻支援センター、その他多くの皆様方に御礼申し上げます。

研修データ（前半）

期間：2012.10.23-26

場所：石巻山城町教会、YMCA石巻支援センター

受講者：12名（うち女性2名）

宗派内訳：曹洞宗、浄土真宗(2)、真言宗醍醐派、立正佼成会(3)、イスラーム、本門法華宗、孝道山本佛殿(2)、日本基督教団

地域：宮城、東京、神奈川、静岡、大阪、兵庫、韓国

年齢：25才～56才

今回の研修は、宗教者が公共的空間で宗教的ケアを行なうために必要な知識を身につけ、傾聴技術を養い、宗教者としての経験を積むことなどを目的として(1)講義・グループワーク、(2)行脚、(3)実習に分けて行われた。

今回の研修の特徴は、被災地住民の悲嘆に寄り添うという意味も込めて、多くの死者を出した石巻市における行脚を行なったこと。被災地住民を対象とした傾聴喫茶カフェ・デ・モンクを実習現場としたこと。神道、仏教、キリスト教、イスラーム等の諸宗教の宗教者を受講者に迎えて、多・他宗教同士の学び合いを重視した点である。とりわけ最後の点は、信仰の異なる（または持たない）者同士が集まる場所である公共空間においてこそ宗教者の真価が問われるのではないかという観点からも重要な要素であった（なお、予定されていた神職一名の参加は、スケジュールの都合で直前にキャンセルとなったが、真言宗僧侶の受講者は神仏集合の修験道のスタイルで行脚に加わった）。

また、毎日朝と晩に、「日常儀礼」を取り入れたことも、今回の注目すべき要素である。これは、毎回持ち回りで一名を担当者として、自宗派で日常的に行なっている儀礼（お祈り、勤行など）を行ない、受講者

一同がそれに加わるというものである。多・他宗教の儀礼に参加してみることで、自らの信仰や宗教実践を対象化し、相対化する経験が得られるという効果が期待されている。もちろん、自分の信仰を曲げて他宗教の神に礼拝することを強制するものではなく、各自が可能な範囲で他宗教の儀礼に参加するのである。



日常儀礼（曹洞宗『修証義』を読む）

研修初日は、津波による死者を多く出し、決して癒えることのない傷を残した北上総合支所からにつこりサンパーク前を経て、大川小学校までのルートにおける行脚で幕を開けた。行脚は金田諦応師（通大寺）の他、小野大龍師（広最寺）と吉田裕昭師（高福寺）にご指導いただき、曹洞宗の流儀で行われた。10月とはいえ冷たい雨に打たれながらの行脚となり、受講生は身が引き締まる思いをしたことと思う。行脚の行列を待っていて手を合わせる住民の方々の姿や、通り過ぎる工事用車両が減速し、徐行してくれるといった光景が見られた。

行脚の後は会場としてお借りした日本キリスト教団石巻山城町教会に戻り、金田諦應師の講義「カフェ・デ・モンク」において、身につけてきた教義を捨ててまで相手に寄り添っていけるかという臨床宗教師の覚悟について学んだ。



研修二日目は、実習として、石巻市の仮設住宅において、金田諦応師や及川靖丈師（官庭寺）の協力によって開催されたカフェ・デ・モンクに加わった。来場者は女性のお年寄りや子連れの若いお母さんを中心に40名ほどであり、受講生達は初めての経験に戸惑いながらも被災地住民の方々のお話に耳を傾けていた。山の向こうに大きな虹が現われたのが印象的であった。この日の講義会場には東京YMC A石巻支援センターをお借りした。講義科目は「臨床宗教師の理念」（伊藤文雄）、「臨床宗教師の倫理」（小西達也）、「公共性の確保」（川上直哉）、「会話記録の作成法」（谷山洋三）、「民間信仰」（鈴木岩弓）であり、これに実習を振り返るグループワークが加わり、盛りだくさんな一日であった。

研修三日目は石巻駅前を起点とする石巻市街の行脚を行なった。先導して下さったのは曹洞宗の北村暁秀師（法山寺）である。壊滅的な被害を受けた地区を通り、湊第二小学校、門脇小学校で鎮魂の読経に加わった。行脚する姿に手を合わせてくださる住民の方々が見られた。続いて災害廃棄物処理施設に建てられた慰霊塔の前で、法華経系、浄土真宗、曹洞宗、イスラーム、キリスト教という



グループに分かれて順に鎮魂の祈りを捧げた。途中、キリスト教、イスラームの祈りの時に、晴れた空から雨が落ちてくるといふ出来事があった。

夜は再び石巻山城町教会に戻り、「地域と文化」（辺見清二）、「宗教的ケア」（谷山洋三）の講義を実施した。この日からグループワークが始まり、谷山准教授の指導のもと、ロールプレイを体験することになったが、受講生の適応の早さに驚かされた。また、地鳴りとともに強めの地震があり、震災の余波を肌で感じる事となった。



研修最終日の四日目は、午前中に講義（谷山洋三「グリーフケア」）とロールプレイを行なったあと、午後に二度目のカフェ・デ・モンクでの実習となった。この日は約50名の来場者があったが、今度は受講生に落ち着きが見られ、和気藹藹とした雰囲気の中で言葉を交わしていた。夕方にカフェを撤収し、実習振り返りのグループワークを行ない、日常儀礼を行なった後、解散。電車やバスに分かれて帰路についた。三週間後に後半のプログラムが待っている。（高橋



二度目のカフェ・デ・モンクを終えて…。

研修前半スケジュール概要

1日目(10/23火)	2日目(24水)	3日目(25木)	4日目(26金)
7:00	朝食	朝食	朝食
8:00	日常儀礼 キリスト教	行脚 F	日常儀礼 イスラーム
9:00	臨床宗教師の理念 L		ロールプレイ G
	臨床宗教師の倫理 L	石巻駅前～ 湊二小～ 門脇小～ 廃棄物処理施設	グリーフケア L
10:00	臨床宗教師の公共性 L		昼食 休憩
11:00	昼食 休憩	昼食 休憩	実習 F
12:00	集合1200石巻駅前 オリエンテーション	実習 F	カフェデモンク
13:00	自己紹介・参加動機	悲嘆 G	
14:00	行脚 F	悲嘆 G	
15:00	北上支所跡～ にっこり前～ 大川小	地域と文化1 L	
16:00		地域と文化2 L	
17:00	実習振り返り G	宗教的ケア L	実習振り返り G
18:00	宿泊所へ	会話記録の作成法	日常儀礼 G
19:00	夕食 休憩	夕食 休憩	解散
20:00	カフェデモンク L	民間信仰 L	
	日常儀礼 曹洞宗	日常儀礼 浄土真宗	
		日常儀礼 孝道山本仏殿	

Lecture 講義
Group 分かち合い
Field 実習

研修前半を終えて —受講生の感想—

吉田敬一（浄土真宗泰心山西栄寺）



三年前に小学一年生の長女を亡くして以来、遺族としての心情が強くはたらく、宗教者としての私は混乱しました。知識としての教理や教則と、

亡き長女を想う気持ちとが交わることはありませんでした。そんな中で、様々な宗教家が集まり、被災地の中で、悲嘆と共に宗教がどう寄り添うかを「臨床宗教師研修」という新たな試みを通じて創り出すと聞き、暗いトンネルの中で見えた一筋の光のようでした。実際研修に参加して、他の宗教者の皆様の伝統教団の教えに基づいた心豊かな人柄に触れさせて頂き、改めて「教え」素晴らしさと凄さを実感することができたのは喜びでした。でもそれ以上に、新たな宗教の価値観を生み出そうとする実践宗教学の力強さは、今後、世の中を照らす光明になり得ると確信致しました。臨床宗教師研修にかかわられておられる全ての方々へ心より御礼申し上げます。

永野将司（イスラーム）



私の尊敬するムスリムの1人であるモハメッドハタミ氏は『文明の対話』で「（対話によって）共通の思想が発展し、その共通の思想によって人類の苦痛を取り去るための、共通の努力がなされることになる」と述べました。

仏教・キリスト教・イスラームという世界三大宗教の宗教者が集まり様々な対話がなされた今回の研修はまさに「共通の思想によって日本の様々な苦

痛を取り去るための共通の努力をする」第1歩であったと感じております。

その第1歩に自分が参加できたことを嬉しく思うとともに、重い責任を感じているのも事実です。研修後半も責任を果たすべく多くの学びを積んでいきたいと思います。

高橋悦堂（曹洞宗）



様々な宗教背景を持つ研修生同士の協力、研鑽はとても刺激を受けた。多宗派の宗教者が共に行脚し傾聴活動をする。その姿を見た方々は驚きと同時にどこか安心感を覚えたのではないだろうか。

互いの信仰は異なれど、苦しんでいる方の力になりたいと思う気持ちは同じだ。己の信仰をしっかりと持ち、それに裏打ちされた優しさをもって広く人々に寄り添う者が臨床宗教師なのではないか。今回の研修でその事を強く感じた。

佐藤正浩（孝道山本仏殿）



宗教者が一般の方に対して精神的なケアができるという研修だったので興味があり参加させていただきました。

被災地では長期のケアが必要で特にだんだんとボランティアが少なくなってくると孤立感が募ってくると言われており自分も気になっていた事でした。今回は仮設住宅の集会所で傾聴をさせていただきましたが、いざ傾聴の場になるとなかなか心の奥を聴くことはできず難しさを実感しました。研修の中で「話をする人達はこの人は自分の心の奥を話しても大丈夫な人か確かめながら話しているんだよ」と言われました。ぜひ、この研修をとおして心の奥を話してもらえよう学んでいきたいと思っています。

榊 雄太（立正佼成会）



臨床宗教師研修の前半を終えて大きく感じたことは二つあります。一つ目は震災以降、主に津波の被害に遭われた

方々に対して宗教的なケアが必要だということです。宗教者になら相談できることなどがあることを実際に目の当りにし、体感することができました。宗教者にできる心のケアについて学び、深める必要性を感じました。

二つ目は聞くことの難しさです。私は今まで聞いているつもりになっていたことに気づきました。私はいつも最後にはこうしたらいいんじゃないかなどと言っていました。それはあくまでも私の考えで、本当はただひたすら話を聞かせてもらう中で、相手から求められたことに私ができる最大限の対応をみせていくことが今の私に必要だと感じました。

木塚季代子（立正佼成会）



今回、カフェ・デ・モンクについての講義を頂き、しっかりした準備と細やかな配慮の上に傾聴活動の場がつけられていることを学び、その後、2回、活動の場に参加させて頂きました。深くお話を聴かせて頂くことはできませんでしたが、言葉をはじめとする知識や理解の乏しさ、緊張などの私自身のこころの壁、また、初回と2回目の違いを感じました。その場に身を置き、その時の自分の行動と気持ちを振り返るということを積み重ねていくことが大事だなと思います。



大崎功（孝道山本仏殿）



各講義は、大変勉強になりました。また、自分の悲嘆に触れてのグループワークでは、誰かに話したかった思いに気づきました。

それと年下に話すことに抵抗を感じましたが、そのことに気づいたお陰で傾聴実習に役立ちました。

行脚は初めての経験でした。門脇小学校で2階から梯子をかけて裏山に再避難した話を伺いました。その後の仮設住宅の集会所での傾聴実習において、対応した女性の息子さんが校内から梯子を探しての2階からかけたといひ、不思議な出会いを感じました。また、その女性が生き生きと話している顔が印象的でした。他の方からは、お坊さんだから何でも話せるという言葉聞いて、今回の研修の大切さと僧侶としての自覚を新たにしました次第です。

不可思議な出来事もありました。それは、慰霊塔の前でそれぞれの宗派宗教の読経が行われましたが、その時だけ雨が降ってきたことです。偶然な出来事ではなく深い意味が込められていると受け止めています。

菊池りえ（立正佼成会）



参加するに当たり最大の動機は、宗教者が出来ることを具体的にしたいということであつた。

宗教色を出すとか何とか動きにくい現代の社会であるから、このような社会に適応した宗教者のあり方を勉強させていただきたかった。参加させていただき、被災された方々との出会いの中で見えてきたのは、祈りという行為を通して届けられるぬくもりの偉大さ。このぬくもりを届け合うことが宗教者の具体的な行動に通じるのではないかと。このようぬくもりを届けられることができる宗教者

になるというテーマをもって後半を望みたい。

石川清章（本門法華宗）



先ずはこの度、第一回東北大学実践宗教学寄附講座臨床宗教師研修に参加させていただいたご縁に感謝申し上げます。忘れもし

ないあの3.11を胎動の契機として、現代社会の抱える前線の命題を眼前に、宗教者の真正にして神聖なる公共性とその所在を探究する本研修に、深く感銘を覚える。一言に尽くせないまでも、前半部を経ての所感は、実証科学の方途のみでは対応し得ない霊性等の人間理解とグリーフケアの実際、宗教的叡智や宗教資源の再考察、更には、震災を通じてより露わになったコミュニティの問題等、本研修は深度ある諸視点から、現代社会における宗教者の在るべき姿を示唆するものである。関係各位の果敢なる挑戦と、諸先生の慧眼に導かれる本研修の成功を、確信とともに願ってやまない。

宇崎大輔（浄土真宗泰心山西栄寺）



衝撃だった。自分がなにを今まで見ていたのか、話していたのか。「教義ではこうだから、こう話せばいいのだ」と、自分自身が凝り固まった考え方で、目の前の遺族の希望・救いを聞けてなかったのだと。何故話し、誰に話していたのかを考えれば答えられた話だったが、あえて耳を塞いでいたと思った。聞いていたつもりだったんだ、と。

今回の研修。自分の浅はかさと図に乗っていたのことを教えてもらえる研修だった。これからは、この研修を意義あるものとする為に自分が今回見た・経験した事を無駄にしない為にも一軒、一軒。心底丁寧に対応したいと思う。

後半も頑張るぞ！

天野秀栄（真言宗）



このたび臨床宗教師研修に参加し、学びの機会が得られました事を神仏と関係者各位に感謝します。被災地である石巻市に在住する僧侶として

で多くの教示をいただきました。

特に研修生による「行脚」は非常に印象的でした。私は当山派（真言宗）の修験者として抖擻（とそう、歩いて修行する事）の姿で参加しましたが、様々な宗教者により「歩く」という行為が「鎮魂」という共通の祈りの表現にされたと思います。

震災から一年半以上が経過していても被災地では、また日本では異常事態・緊急事態が続いていると私は思います。それら問題に対峙する宗教者の集団として、必要不可欠な「融和」を象徴する行動であると思いました。



崔長壽さん（日本基督教団）



研修四日目のカフェ・デ・モンク終了後の記念写真

第一回臨床宗教師研修後半について

今回は誌面の都合や編集日程の都合により、研修前半のみをとりあげて紹介したが、研修後半のプログラム（実施済み）について主な内容を以下に記す。

期間：2012.11.13-16

場所：石巻市内（曹洞宗統禅寺）

受講者：前半に同じ

講義：黒住宗道「宗教間対話」

金澤 豊「被災地支援」

川上直哉「人権擁護」

川上直哉「放射能の問題」

佐々木清志「精神保健と医療（概論）」

グループワーク：前半の傾聴実習をもとにした会話記録の検討

研修受講者による日常儀礼

実習：カフェデモンク（二回）

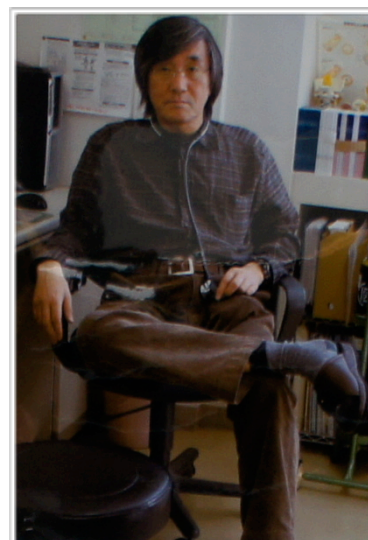
石巻市日和山公園における鎮魂・慰霊・追悼

石巻市渡波松原町堤防における鎮魂・慰霊・追悼

食品放射能計測所見学

第二回臨床宗教師研修について

現在多くの方から次回の研修についてお問い合わせをいただいておりますが、実施時期、内容は未定です。申込を検討されている方は、住所・氏名・年齢・所属宗派などを明記の上、実践宗教学寄附講座までご連絡をいただければ、次回の実施内容が決まり次第、メール・郵送などで資料をお送りいたします。



活動報告

日本宗教学会パネル発表

「公共空間における宗教的ケアのあり方：臨床宗教師の可能性」

2012年9月8日、皇學館大学における日本宗教学会2012年度学術大会において、「公共空間における宗教的ケアのあり方—臨床宗教師の可能性—」と題してパネル発表を行いました。このパネルは、実践宗教学寄附講座開設以来、臨床宗教師とはいかなるものであるのか、その可能性と問題点を検討しあってきたその成果を、講座スタッフ揃い踏みで世に問う初めての機会となり、いわば旗揚げ公演的なイベントとなりましたので、ここにご報告するものです。このパネルは我々の試みについて中間報告と問題提起を行ない、広く建設的な意見をいただくことがその目的であり、今後も引き続き臨床宗教師のあり方について検討を行なっていく際のひとつの出発点として位置づけられることになります。各自の発表要旨については、『宗教研究』に掲載予定であり、また当講座のホームページにも掲載してありますので詳しくはそれを参照していただくとして、以下ではパネル全体の概要と質疑応答を中心に当日の様子を振り返ることとします。（高橋原）

発表内容

高橋 原（東北大学）

「ケアにおける宗教性再考」

小西達也（爽秋会岡部医院）

「米国の病院チャプレンにみる公共空間での宗教的ケアの在り方」

森田敬史（東北大学）

「医療現場の宗教者からみえてくる宗教的ケア」

谷山洋三（東北大学）

「被災地から見た「臨床宗教師」の可能性と課題」

鈴木岩弓（東北大学）「コメント」



まず高橋より、本パネルが東北大学に新たに開設された実践宗教学寄附講座における「臨床宗教師」養成のプロジェクトに関わる当事者達によって、宗教者が公共空間において心のケアを行なう際の課題と可能性を論じるために企画されたものであると趣旨説明がなされ、宗教学を専門とする二人（高橋・鈴木）と、チャプレンやビハラー僧としての現場経験を持ち、すでに「臨床宗教師」として活動してきたとも言い得る三人（小西・森田・谷山）からなるというパネル構成員の特徴も説明された。

高橋の発表は、本誌第一号「臨床宗教師のコンセプト」に沿ったものであったが、パネル全体に通じる問題として、「スピリチュアルケア」と対比しての「宗教的ケア」の概念について説明した。「宗教的ケア」は特定宗教の方法に従って予め用意された答えを提供する形となるという基本的性質を踏まえた上で、「心」に特化した働きかけをせず、殊更に感情表出を求めたり内省を促したりしないので「心のケア」を受けるという心理的ハードルが少ないといったメリットと、用い方によっては公共空間にそぐわないものになるというデメリットを指摘した。そして、被災地には実際に「宗教的ニーズ」が存在し、それを受け止める宗教者が



が足りないが、自分の信徒を相手に活動してきた従来の宗教者では足りない（「臨床宗教師」が必要とされているのではないかと結論した。

小西の発表では、自身の体験に基づいて米国での病院チャプレンがどのように宗教的ケアを提供しているかが紹介された。スピリチュアルケアを基本としながらも、対象者のリクエストに応じて祈りや祝福、儀式を行なうことがあるという。宗教的ケアの対象者と提供者の信仰が一致しないことも多いことから、チャプレン自身が自らの信仰を相対化し、広く様々な宗教宗派の教えに開かれ、学びを深めている必要があることが指摘された。米国の病院チャプレンは、その教育システムであるCPEプログラムによって訓練を受け、特定宗教宗派の教えを押しつけず布教目的の活動を行わないことなど、厳格な職業倫理の下で働いており、病院組織のみならず多くの患者・家族や地域の宗教者からも一定の権威が認められた存在であることが指摘され、臨床宗教師を考えるうえで大いに参考にすべきであることが示された。



森田の発表では、かつて勤務していた長岡西病院を例に、医療現場における宗教者のあり方が吟味された。開設当初は病院内で違和感を抱かれていたビハール僧の存在が自然なものとして受け入れられていくには、宗教者（仏教者）としてのアイデンティティを確認しながら日常生活の何気ない関わりを通じて関係性を構築していくことが必要であったことが指摘された。それによって利用者の中の仏教（あるいは仏教僧侶）に対する潜在的ニーズが浮かび上がり、宗教的ケアの提供が可能となっているのである。また、病院外のボランティア僧との連携についても紹介され、日本仏教という文脈の中で、臨床宗教師が果たし得る公共的役割について有益な考察が提供された。



谷山の発表では、さまざまな医療施設等での患者・家族・スタッフのケア、被災地での読経ボランティアや傾聴活動などをしてきた経験に基づいて、臨床宗教師の可能性と課題について考察された。臨床宗教師は信仰を捨てるかのような

誤解があるが、臨床宗教師としての活動に従事する間は布教伝道や政治的主張などの教団の利害から一時的に離れるのであって、宗教的資源を活用して一個の宗教者として活動することに変わりはなく、異なる宗教と接することでかえって信仰が深まることもあり得ると説明された。またとりわけ、宗教者にとって「アウェイ」である公共空間で宗教的ケアが提供されにくい理由として、①政教分離の壁、②布教の疑義、③専門職と宗教者の協力の経験不足、④ケアの意義が不明確、⑤「ケア」という言葉の壁、などが指摘された。それを克服するために、「超宗教」「超宗派」で協力すること、倫理綱領の明文化、医療・心理の専門職や地元の宗教者との連携、自宗教の壁を越えたわかり言葉遣いをするなどが提案された。

コメンテーターの鈴木は、臨床宗教師が構想されるに至った経緯を「実践宗教学寄附講座前史」と題して報告し、とりわけ国立の東北大学を舞台として臨床宗教師養成の試みが始まったことの意義が強調された。



《質疑応答》

以上を踏まえてフロアとの質疑応答が行われた。一問一答の形でこれを要約して示す。

——隣接領域の専門家と比較しての臨床宗教師の専門性はどこにあるのか。

端的に、宗教的ケアが核となる。お経にしても僧侶が唱えるほうが効果があり、とりわけ遺体との対面など典型的場面での活動で宗教者の専門性が発揮される。

他宗教との学び合いを踏まえて現場に出ることがひとつの特徴である。

——臨床宗教師になり得る人材が大教団所属の宗教者に偏っているのではないか。例えば沖縄では、教団に所属しないさまざまな民間宗教者が宗教的な役割を担っている。

現状として仏教とキリスト教の協力が前面に出ていることは事実である。それ以外の宗教間の協力の形は未知数の部分が多く、研究課題である。

——中立性への配慮があるとしても医療的アプローチにはない宗教性を打ち出すためには宗教的言葉を積極的に用いるべきではないか。

宗教的用語をどう用いるかという問題はもう少し先の課題となる。人間同士の信頼関係構築が第一に必要であり、その上で宗教的用語が有意味なものとなり得る。

——医療現場においては西洋近代医学の世界観が前提とされており、ニーズとサービスが対応している。諸宗教の多様な差異を捨象した、いわば去勢された宗教は抜け殻にすぎず、大切な価値を伝え、既存の価値観をぶち壊すような宗教本来のエネルギーが失われるのではないか。

現場では宗教とそうでないもののグレーゾーンも含めて仏教であるという関わり方をしてきた。医療現場では誰のために行なうのかという基本が大前提であるが、そのようなスタンスが、実は「ぶち壊す」ということにつながり、とりわけ被災地発という性格が既存のものを超える可能性に開かれているのではないか。

現場ではむしろ、あまり深くない宗教的な関わりが主であり、深い部分はプライベートな領域で行なうことになるので、両方が必要である。

現場の立場と、教理や理念を重視する立場がぶつかり合うことは当然あり得るが、双方が認めあって切磋琢磨することが必要だと思われる。

——宗教者ではない素人が臨床宗教師となることはあり得るのか。民俗宗教的なものの扱いはどうなのか。

米国でチャプレンになるためには指定された宗教組織からの推薦状を得なければならないが例外もあり、日本への応用について多角的な検討が必要である。

とりあえず、公共性をどう担保するかということに配慮して既存教団所属の人に限定してスタートしているが、そ

れ以外に開いていくことは今後の課題となる。

——死後の世界を語ることこそが宗教者固有の役割であり、この要素は臨床宗教師に欠いて欲しくない。

従来チャプレン等の役割が死の問題を焦点に当てすぎてきた。その重要性は言うまでもないが、むしろそれに限定されない活動の可能性を考えていきたい。

宗教者といっても宗教性に特化することなく、それ以外の日常的な部分で関係性を築いていくことが重要なのではないか。



最後にコメンテーターの鈴木より、この試みが現代日本の宗教状況に新たな風を吹き入れるような動きになって「宗教」は怪しげなものだという風潮に変化をもたらし、いずれ病院や福祉施設などさまざまな施設に臨床宗教師がいるようになればよいという期待感が語られてパネルが締めくくられた。

ここに紹介できなかったものも含め、多くの有意義なコメントや質問を頂戴し、活発な議論が展開された。幸い会場は満席で立ち見も出るほどの盛況であり、実践宗教学寄附講座の試みを多くの方々に理解していただけたのではないかと考えている。（高橋原）

《2012年度後期開講科目》

授業名：グリーフケアと宗教

担当者：谷山洋三

内容：宗教・宗教者によるグリーフケアのあり方について学ぶ

登録者数：25（大学院文学研究科4、文学部20、法学部1）

授業名：実践宗教学基礎実習

担当者：谷山洋三・高橋原

内容：グリーフケアに関わる研究者としての基礎的な傾聴スキルを身につける

登録者数：3（大学院文学研究科3）

授業名：死と宗教心理

担当者：高橋原

内容：お迎え現象、臨死体験などを宗教学的に考える

登録者数：125（教育学部2、工学部1、法学部4、文学部112、大学院文学研究科6）

《発表・講演》

8月24日 谷山洋三「宗教的ケアにおける教化の二側面——<既信徒教化>と<未信徒教化>——」仏教看護・ピハール学会第8回年次大会（於淑徳大学）

8月27日 鈴木岩弓「東北大学実践宗教学寄附講座における『臨床宗教師』の構想」（於無限洞）

9月1日 谷山洋三「『心の相談室』の活動と『臨床宗教師』の提唱」日本仏教社会福祉学会第47回大会シンポジウム（於京都華頂大学）

9月7日 鈴木岩弓「東日本大震災における『絆』復興にみる宗教の“ちから”」日本宗教学会第71回学術大会公開シンポジウム（於皇學館大學）

9月8日 谷山洋三・高橋原・鈴木岩弓「公共空間における宗教的ケアのあり方：臨床宗教師の可能性」日本宗教学会第71回学術大会（於皇学館大学）

9月11日 谷山洋三「ピハール僧、チャプレンから臨床宗教師へ」全国青少年教化協議会主催「仏教の社会貢献を考える集い」（於大正大学）

9月29日 谷山洋三・特別対談「東日本大震災の悲しみに寄り添う」総合レスポンス 第5回日本スピリチュアルケア学会学術大会（於龍谷大学）

10月9日 鈴木岩弓「日本人の信仰構造—仏教と民俗の関わり合い—」真言宗御室派徳島県青年教師会30周年記念講演

10月15日 谷山洋三「グリーフケアと宗教」第3回悲嘆学講座（於東京福祉大学）

10月19日 谷山洋三・シンポジウム「宗学の現代的意義—大震災を経験して—」座長 日本密教学会第45回学術大会（於高野山大学）

10月20日 谷山洋三「宗教者・宗教の果たす役割」医療の心を考える会パート3 シンポジウム第2部（於長岡商工会議所）

10月27日 谷山洋三「東日本大震災 被災地より」高野山真言宗青年教師会主催東日本大震災追悼シンポジウム（於東北大学さくらホール）

11月11日 鈴木岩弓「東日本大震災後の心のケア—東北
大における臨床宗教師構想—」東北大学萩秋会九州交流会

11月13日 鈴木岩弓「公的領域における宗教の役割」仙
台ロータリークラブ例会

11月18日 谷山洋三「第1回臨床宗教師研修の報告」東北
大学実践宗教学寄附講座&心の相談室主催 故岡部健先生
追悼緊急シンポジウム（於東北大学萩ホール）

11月24日 谷山洋三「スピリチュアルケアと宗教的ケア
の共通点と相違点」第18回日本臨床死生学会大会（於女子
聖学院中高）

11月28日 鈴木岩弓「震災からの復興にみる宗教の力」
第34回世界連邦平和促進全国宗教者・信仰者会議：基調講
演

《論文・寄稿》

谷山洋三「災害チャプレンから臨床宗教師へ」『THE
LUNG perspective』（メジカルレビュー社）20号3巻、
2012夏

谷山洋三「災害時のチャプレンの働き —その可能性と課
題—」『宗教研究』373号、2012

Yozo Taniyama, “The Vihara Movement: Buddhist Chaplaincy
and Social Welfare in Japan,” J. Watts and Y. Tomatsu ed.,
Buddhist Care for the Dying and Bereaved, Wisdom Publications:
Somerville, USA, 2012.11.

高橋原「論・談「臨床宗教師」養成の試み」『中外日報』
2012年9月8日

《新聞報道等》

日本経済新聞 9月1日夕刊
シニア記者がつくるこころのページ
臨床宗教師を養成 鈴木岩弓さんに聞く

中外日報 2012年9月15日
「臨床宗教師」を考える／日本宗教学会学術大会／日本版チャ
プレンの役割とは／関心集め会場満席

週刊RNS（宗教通信社のメールマガジン）第37号（通巻60
号） 2012年9月20日
「臨床宗教師」のあり方を探る／日本宗教学会でパネル発表

仏教タイムス 2012年9月20日
仏教者の社会的責任とは？／全青教シンポ 社会苦への対応を議
論／震災、貧困、自死などテーマ多く

新宗教新聞 2012年9月25日
宗教の公益性問う／東日本大震災での活動は／課題や役割など指
摘／日本宗教学会学術大会／個人・パネル発表から

仏教タイムス 2012年9月27日
日本宗教学会「宗教的ケア」パネル／臨床宗教師 傾聴が基本／
踏み込んだ心のケアを／宗教協力で布教と一線

月刊『SOGI』131号(22-5) 2012年9月、84-85頁
宗教界注目の「臨床宗教師」養成プロジェクトが本格始動／悲嘆
を抱える人々のケアにあたる「公共性をもった超宗教・超宗派の
宗教者」とは（太田宏人）

読売新聞 2012年10月8日
鈴木岩弓「一家言」宗教者 もっと表に

朝日新聞 2012年10月22日夕刊、同23日朝刊宮城版
「心の相談室」岡部健さん死去／被災地で医療と宗教結ぶ
（伊佐恭子）

仏教タイムス 2012年11月1日
「柴扉抄」（臨床宗教師研修について）

朝日新聞 2012年11月20日
現場に生かす祈りの力／宗教者の人材育成始まる／心のケアで
きる専門家 信仰押しつけず（伊佐恭子）

毎日新聞 2012年11月20日
宗教者：死に直面する人支え／「あの世の話」否定せず傾聴／被災
地、病院での活動養成（下桐実雅子）

中外日報(2012年11月20、22、27日)
「いのち寄り添う 大震災 苦の現場から」（北村敏泰）
第26回 「語り難い」体験を聴く 魂をケアする臨床宗教師
第27回 心の内を共感的に理解 宗教を現場で実際活用
第28回 「怖がらなくても大丈夫」希望を語る臨床宗教師

河北新報 2012年11月24日（その他、高知新聞11月25日、千葉
日報11月25日、大阪日々新聞11月26日、山陽新聞11月26日、
信濃毎日新聞11月27日、SANKEI EXPRESS11月27日にも同
記事配信）
こころ 信仰・社会・人生／日本人ムスリムを生きる／ 自然体
バランス考え（共同通信・西出勇志）

【TV】東日本放送スーパーJチャンネルみやぎ 2012年11月28
日
宗派・宗教を超えて「臨床宗教師育成」に密着

『在家仏教』2012年12月号、6-8頁
赤川浄友「今、まさに仏教の出番—臨床宗教師に期待する」

『仏教企画通信』30号、2013年1月1日
佐々木宏幹「宗教的『あいだ＝かかわりあい』考（続）」

寄附者

東北大学文学研究科実践宗教学寄附講座は宗教界など各方面からの寄附金によって維持運営されています。寄附者の方々にここに記し感謝申し上げます。

日本基督教団
南西ドイツ宣教会(EMS: Evangelical Mission in Solidarity)
日本ナザレン教団
常念寺(真宗大谷派)
新光寺(天台真盛宗)
西念寺(天台真盛宗)
西方寺(融通念佛宗)
宗教法人みんなの寺
匿名

公益財団法人世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会
日本キリスト教協議会エキュメニカル震災対策室
財団法人東北ディアコニア

ご寄附の窓口

財団法人東北ディアコニア
〒980-0012
宮城県仙台市青葉区錦町1-13-6 エマオ2F D
TEL: 022-263-0520/FAX: 022-263-0521
e-mail: sendai@tohokuhelp.com

または当講座に直接お問い合わせください。

編集後記



この3ヶ月は本当に盛りだくさんで、祭りのように過ぎていきました。岡部先生とのお別れを受け止めながら、皆、立止る間もなく忙しく働き続け、11月には無事に第一回臨床宗教師研修の後半が終了し、先生のご遺志の一つを形にすることができました。

研修の様子はテレビ、新聞などで好意的に伝えていただき、受講希望の問合せも日々舞い込んでおります。皆様のご支援に感謝しつつ、引き続き反省と自戒を忘れずに前へ進んでまいりますので、ご指導と叱咤激励のほどよろしくお願い申し上げます。最後に、こだわらないひょうきんなお姿の岡部先生の写真を掲げて編集後記とさせていただきます。(た)

き、受講希望の問合せも日々舞い込んでおります。皆様のご支援に感謝しつつ、引き続き反省と自戒を忘れずに前へ進んでまいりますので、ご指導と叱咤激励のほどよろしくお願い申し上げます。最後に、こだわらないひょうきんなお姿の岡部先生の写真を掲げて編集後記とさせていただきます。(た)

東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター第2号

編集・発行 東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座

2012年12月10日

(このニュースレターは右記ホームページからも閲覧できます。)

実践宗教学寄附講座運営委員会

学内委員

鈴木岩弓 実践宗教学寄附講座教授(兼任)
谷山洋三 実践宗教学寄附講座准教授
高橋 原 実践宗教学寄附講座准教授

学外委員

川上直哉[委員長] 日本基督教団仙台市民教会主任担任教師
(財)東北ディアコニア理事長
伊藤文雄 元ルーテル神学校教授
金田諦應 通大寺住職
井形英絵 日本バプテスト連盟南光台キリスト教会牧師
佐藤央千 竹駒神社権禰宜
小西達也 (医) 爽秋会チャブレン
金沢 豊 浄土真宗本願寺派総合研究所研究員
篠原祥哲 (公財)世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会
仙台事務所所長
櫻井恭仁 心の相談室理事(財務担当)
〔事務補佐員〕佐藤千尋

980-8576

宮城県仙台市青葉区川内27-1

東北大学文学研究科内

実践宗教学寄附講座

022-795-3831(T/F)

j-shukyo@g-mail.tohoku-university.jp

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/p-religion/top.html>



東北大学